

白昼夢

真芽

どこか高いところから足を滑らせる夢を見て、僕は目を覚ました。

驚いて飛び起きると、どうやら学校のようなだった。いつの間にか、机に突っ伏して寝てしまっていたらしい。

寝起きのせいか、目の前の景色がやけに霞んでいる。

さっきまで見ていた夢が、あまりにも現実味を帯びていたので、しばらくの間、僕はただ黒板をぼんやりと眺めることしかできなかった。

心臓は早鐘を打っている。

教室にはもう誰もいないのか蛍光灯は点いておらず、夕日の光だけが教室の窓から差し込んでいた。

ふと時計に目をやると、時計の針は五時過ぎをさしたまま、動きをとめていた。電池が切れているのか、もしくは壊れてしまったのだろうか。

僕は窓際の席に座っていたようで、左側のグラウンドから部活動に勤しむ生徒らの掛け声が、窓を通して聞こえて

くる。

「……悪い夢でも見たのかしら？」

突然、後ろから声がした。

一度落ち着けかけた心臓が、また少しだけ大きく跳ねた。

声のした方へ振り返ってみると、僕が座っていた席の斜め後ろの席に女の子が一人、ぼつんと座っている。名前は分からない。

「えっと……」

何と答えていいか分からず戸惑っていると、彼女はひどく驚いたように肩を震わせてから、ごめんなさい、と申し訳なさそうに頭を下げた。

「あなたが余りにも驚いていたようだったから、つい……」

言葉尻を濁して、彼女もまだ黙り込んでしまう。

俯いてしまった顔は、前髪に隠れてよく見えない。

彼女の小さな手には、どこか見覚えのある本が握られていて、ついさっきまで僕の後ろの方で読書をしていたのだと気が付いた。

彼女は押し黙ったまま、そこへ固まってしまったように身動きひとつしない。

このまま黙っているのも気まずいと思い、僕はゆつくりと話し始める。

「……夢を、見た。高いところから落ちる夢。たまに見えないかな。底が見えないような真つ暗な崖の上に一本の白くて細い道があつて、そこを歩くような……」

どう表現すればいいか、言葉に詰まりかけたその時、彼女の口が開いた。

「少し、分かります……ちよつとだけ居眠りしていたとき、とかに……」

おそろおそろといった様子で、彼女は目を逸らして言った。僕と同じで、あまり人と話すのは得意じゃないタイプのようなだった。

茜色に染まった教室はひどく静かで、僕と彼女以外は誰もいない。暖かな夕焼けの光が、じんわりと背中に当たっているのを感じる。

何だか不思議な気分だった。

「……クラスメイトがさ、この前死んだんだ。だからかな、こんな変な夢を見たのも」

無意識のうちに声が出ていた。

「お知り合いの方、だったんですか……？」
遠慮がちに彼女が尋ねる。

彼女と目が合った。その目には妙な力強さのようなものがあつて、少し驚いた。

「いいや、全然。多分だけど……違うと思う。いつも一人で本を読んでいて、クラスメイトと話すのが苦手で……そんなやつだった気がする」

どうしてだろうか。彼女の前だと、僕は思っていることを何の気なしに話してしまうようだった。

そのことに気付くと、だんだん恥ずかしくなつてきて、僕は思わず頭をかいた。

「そう、ですか……」

彼女は戸惑いをその顔に滲ませたまま、再び僕から目を逸らして俯いてしまった。

彼女はとても美しい女の子だった。一瞬だけ見えただけだったが、しなやかに伸びた長い睫毛の間に、黒く澄み切った大きな瞳がそつと顔を覗かせていた。鼻は彫刻で綺麗に象られたように真つ直ぐで、その下には控えめに小さな唇が二つほど添えられている。

そこでようやく、僕は初めに感じた疑問を思い出した。

「えっと……君、名前は？」

そして気付けば、僕はその疑問を口に出してしまっていたのだった。

そう尋ねると、彼女が一瞬だけ悲しそうな顔をしたのが前髪の奥からでも分かった。

遅れて、はっと気付く。

同じクラスメイトなのに、名前を聞くのは少しまずかったかもしれない。

「あ、えっとその……ごめん」

「い、いえ……いいんです」

彼女は申し訳なさそうに頭を下げるが、その声には隠しきれない僅かばかりの落胆があった。

どうにか名前を思い出そうとするが、頭の中は驚くほど真っ白で、到底思い出せそうになかった。

そもそも僕は、彼女といつ出会ったのだろうか。

「……本当にごめん。昔から誰かの名前を覚えるのが苦手みたいでさ。これは僕が悪いから、あまり気を落とさないでほしい」

彼女は俯きがちに、こくりと頷く。

きつと彼女とは何度か話しているはずだ。

彼女と話しているうちに、いつの間にか、そんな確信が頭をよぎるようになっていた。それだというのに、彼女の名前はちつとも出てこない。

彼女の存在が急に遠くに感じてきて、それが少しだけ怖かった。

「それじゃ、改めて自己紹介しておこうかな。多分、君は覚えてるんだろうけれど、僕の名前は……」

そこまで言いかけて、続く言葉が出てこないことに気が付いた。

「僕の、名前は……」

体の内側を風が通り抜けて、胸のあたりが急に冷たくなるような感覚に、僕は身震いする。

思い出そうとして、何ども何ども頭の中で反芻する。

しかし、頭の中はやはり何もなかった。

ふと、自分の掌に視線を落とす。

握ったり開いたりして、手が動くことを確かめる。

幻ではない。この一瞬だけはきつと現実だ。

……だとしたら一体、僕は何者なのだろうか。
答えはもう喉元まで迫ってきている。

その先に進んでしまうことがひどく恐ろしい。

「……僕、は」

あるはずもない救いを求めて、俯いていた顔をあげる。

しかし、彼女はもうそこにはいなかった。

窓から入ってきた風が、そっと頬を撫でる。グラウンドの喧騒はいつの間にか聞こえなくなっていた。

何か高いところから落ちる気がして目を覚ました。

同時にごん、と何かが落ちる音がした。

音のした方に目を向けると、さっきまで読んでいた本が近くの床に転がっていた。どうやら椅子に背を預けたまま、眠りについてしまったらしい。

ふと黒板の上に置かれた時計を見上げると、針は六時に差し掛かっていた。コチコチ、と小さな音を立てて、きちんと時を刻んでいる。

ぼんやりと針の動く様子を眺めながら、私はさっきまで

見ていた夢のことについて考えていた。

だけど、どんなに思い出そうとしても、頭の中は真っ白でも思い出せなかった。ただ何か大切なことを忘れてしまったような喪失感だけが胸の中に残っていた。

……私はさっきまで何を見ていたのだろう。

落とした本を拾い上げると、私は少しだけ表紙についてしまった埃を優しく払う。

時計の針はもう気にならなかった。

私は立ち上がる。

窓の外では、学校の生徒たちがグラウンドで元気にはしゃいでいる。その喧騒がどうしてか、私はやけに懐かしいものに感じていた。

「……本、返すね」

手にした本を、私はそっと机の上に置いた。

もう誰も座ることのなくなった窓辺の席。

その席には、すでに大きなガラスの花瓶が置かれていて。咲いていた白い花は、夕焼け色に赤く染まっていた。